

取材・文／松井大助
撮影／桐原卓也

茨木高校(大阪・府立)

リーダーになりうる想像力と実践力を育み、地域の暮らしの創造を、多様な人と共に進める

「社会を牽引するリーダーになってほしい」と思うからこそ、生徒に感じるいくつかの課題。否定ではなく「期待」することをベースに、地域の人々で生徒を育てようとしている授業の実践をご紹介します。



地域の力も借りて
心を揺さぶる授業を
目指しています



今号の先生

家庭科
いりまじり
入交享子先生

広域通信制の私立高校を経て、府立高校の教員に。大阪府で女性として初の指導教諭に。地元の公的機関・NPO・大学・企業と連携した授業を展開。自身も「宙いもプロジェクト」「いばらき元気隊」「子育て食育実行委員会」など多数のプロジェクトにメンバーとして参加している。

生徒に対する想い

**失敗を恐れず試行錯誤し
想像力をもったリーダーに**

茨木高校の入交先生は、前任校までは、今と異なるタイプの生徒と接していた。

「学力偏差値は高くないが、環境に柔軟に適應する生きる力は高い」と感じた生徒たちだ。調理実習では、計量器の目盛りが読めず、材料の分量計算もできず、最初は失敗。でも習うより慣れるで体でやり方を覚え、めきめきと腕を上げた。家庭の貧困など複雑な事情を抱えた生徒も多かったが、生活の中にあつた豊かな時間、例えば家族と笑顔で過ごした時間を心の中で大切に育み、前に進もうとしていた。よく覚えているのは、「私の夢は、働いて部屋を借りて、児童養護施設にいる弟や妹を引き取ってまた一緒に暮らすこと」と、家庭への愚痴ではなく希望を語った生徒のことだ。そうした生徒たちが「よりよく生きる」暮らしの知恵を習得できるよう、入交先生は、勉強が苦手でも理解しやすい家庭科の授業づくりに没頭した。

現在の茨木高校では、入交先生は、生徒にまた違う長所を感じている。授業で丁寧に説明しなくても、生徒は教科書やインターネットを駆使して自分で調べ、理解を深められる力をもっていたのだ。

ならば、授業の準備は楽になったのか。そうではなかった。理解力は抜群だが、「言葉でわかるのと」本當にわかる」の

は違い、理解したことを実践するのは不慣れ」という別の課題を感じたからだ。

「例えば調理実習で作業の説明をする」と、生徒はすぐ理解します。でも実際にやるとなると、長年「間違っはいけない」という学習してきたので、失敗を恐れて手が止まります。やってみて、失敗したら修復し、試行錯誤して自分のものにする経験が不足しているのです。授業では知識の「入力」だけでなく、学んで考えたことを基に発表や実践をする「出力」まで行うことをより意識するようになりました」

優秀で、将来は各界のリーダーになってほしいからこそ課題に思うこともある。

「想像力をもって物事を考えられるようになってほしいです。本校の生徒には、法律の助け——人間らしい生活の保障などを気にしなくても、暮らしていける子が多いかもしれません。ですが、自分の生活環境以外を想像できなかったら、無知ゆえに人を傷つけ、指導的立場になってもみんなの生活を守れません。想像力が他者への思いやりを生むのであり、その思いやりこそが社会で求められる教養だと思っております」

授業の実践

**安心・安全の場にしたうえで
心を揺さぶるような体験を**

1年生必修の「家庭基礎」では、生活のいろいろな現象・課題をワークショップ形式で考える。みんなで考えて発表や実



材料を計量し、こねて切って丸めて盛り付ける。手順を説明すると茨木高校の生徒はすぐ理解するが、実践をためらうことも。だから頭ではなく「心と体でわかる」ことを目指す。



左は「家庭基礎」で親子を招いた授業。右上は「まちづくり」の授業。右下、家庭科室の廊下には、入交先生のネットワークで集めた大会やコンテストのポスターがずらりと並ぶ。

INTERVIEW



生徒のもつポテンシャルと 社会にある資源を信じている

首席 英語科
もとすが
本管 克江先生

入交先生のすばらしいところは、学校の外まで飛び出す生徒のチャレンジを、できる見通しを立ててからではなく、とにかく応援し続けることです。結果、生徒が発表や大会の数日前まで何もできていないこともあるのですが、悠然とされている(笑)。無責任とは違うんです。生徒の能力を信じ、生徒を助けてくれるさまざまな人の存在も信じているからで、実際、入交先生がもつネットワーク——地域との横のつながりや、卒業生との縦のつながりを生かし、最終的には生徒が自身の力を発揮するところまでもっていくんですよ。

今や入交先生のいる家庭科室は、外部とつながるハブにもなっています。「まちづくり」の授業だけでなく、学校行事や各種コンテストのために社会との接点を求める生徒たちも、家庭科室に行けば何かがある、と放課後自然に集まってくるのです。そして「社会とのつながり」をもつことで、生徒が一回り大きく成長していく姿を何度も目にしてきました。

■ 茨木高校(大阪・府立)



School Data

文理学科・普通科／1895年創立
生徒数(2019年度) 1040人(男子531人・女子509人)
進路状況(2019年度)
大学250人・その他107人
〒567-8523 大阪府茨木市新庄町12番1号
TEL 072-622-3423
URL <https://www2.osaka-c.ed.jp/ibaraki/>

Outline

「高い志」「枠を越える知性」「自主自律の精神」を教育理念に掲げる。大阪府指定の「グローバル・リーダーズ・ハイスクール」の1校。2018年度入学生より全クラスが「文理学科」となり、2年生から理科(理数探究系)と文科(人文社会国際系)に分かれ、また全員が「課題研究」に取り組むカリキュラムになっている。留学生との交流や、ネイティブの講師によるプログラムなど、国際理解の取組にも力を入れている。

習に挑む「出力」の場面が毎回あるのが特徴だ。その授業開きでは「答えのない自由もある」ことを丁寧に説明するという。「グループワークを『問いかけに必ず答えないといけない』と思ってしまうと、自己開示が苦痛になります。嫌なら答えなくいいことを伝え、まずは安心・安全な場所にするのを心掛けています」

向き合うテーマは「家族とは」「生命を育てる」「楽しく食べる」「自分らしく着る」「人間らしく住む」など一生に関わること。既存の常識や価値観を覆すような映画やニュースも積極的に取り上げる。

「自分の見方はこれでいいのかと、生徒の『心の中のさし』を揺さぶりたいのです。その葛藤を通して、深く考える力や、多様性を受容する力を鍛えていけたらと」

学習指導要領にはないが、「死」について考える授業も加えている。愛する人と死別した生徒や、闘病中の生徒がいるかもしれない、難しいテーマであるのは承知のうえだ。入交先生は真剣に投げかける。「この授業で私はあなたたちを傷つけてしまいかも知れませんが、でも、それはまずいと避けていたら、本当に死と向き合ったときにどうなるかな? この教室には助け合える仲間がいて、傷ついた心を癒すだけの力ももっています。先生も覚悟してやるので、死をどのように捉え、どう乗り越えるか一緒に考えてください。ここが嫌だった、ということも教えてください」

途中で涙を拭うために教室をいったん出る生徒もいるが、生徒同士がフォローし合い、心揺さぶられる授業が毎年展開

されている。

**人との関わりの中で
生徒が探究できるように**

教員として「金持ち」ならぬ「人持ち」になることに努め、各方面の力を借りて、多様な人との交流の場も生み出している。「家庭基礎」では、例年、地域で暮らす親子や、高齢者を講師に招いているのだ。

2年生の家庭科の選択科目「まちづくり」では、自身の人のつながりをさらにフル活用する。生徒が「生活者の視点」をもってまちを観察し、まちづくりに資するテーマを自分で決め、調査研究、企画立案、具体的な働きかけ(企画の実行や外部での発表)まで行う授業。そうした実践を、生徒だけの閉じた世界ではなく、

実社会と関わりながら進められるよう、入交先生は培ったネットワークを生かし、外部の人と生徒を意識的につないでいるのだ。例えば、生徒のまちの観察は市役所のマップづくりに参画する形で、おのおのが研究テーマを決めたら、その分野に関連する人や団体、イベントを惜しみなく紹介する、といったように。

「ただし人やイベントの情報提供はしても、それを生かすかどうかは生徒に任せます。生徒が動かないなら興味がなかったのであり、無理にはやらせません。仕掛けては待つ、ですね。教員が手や足を出さなくても、一人ひとりをよく見て情報を届けられれば、生徒は『見てくれている』という安心感をもちます。その関係性があれば、生徒は自分から動き出すんですよ」



まちづくりの鍵を握るのは 「人」だと考えるようになった

茨木市 企画財政部 課長
向田明弘さん

市の職員としてまちづくりの仕事を担当しています。入交先生とは初めてお会いして以来、どこに行ってもお顔やお名前を目にするようになったんですね。地元のお祭りに関われば、入交先生の授業を受ける生徒さんもイベント企画に携わっていて、当日はまた別の生徒さんと入交先生が移動カフェまで開いている。まちづくりや食に関するコンテストがあると、市内でも全国でも、生徒さんに全部任せつつ後ろで見守る入交先生にお会いする。机上的話ではなく、地域のいろいろな人とつながりながら現場で活動されていて、圧倒的に信頼できるんです。

以前はまちづくりといえば、ハードの整備や目玉イベントの創出が目目されていましたが、私は最近、それ以上に「人」が重要だと感じるようになりました。いろいろな人がまちに出て、多様な人とつながり、やりたいことや未来を話し合うことが、まちを発展させると思うからです。入交先生はそれをもう何年も前から続けてこられてきたのだと思います。

この工場を巡って授業をしていたという。そこで入交先生は、若くして社会に出る生

徒と接するときの入交先生の姿勢は、教員生活の中で磨かれてきたと言える。最初に勤務したのは、広域通信制の私立高校。当時は、中学校を出てから全国各地の工場に集団就職した子どもたちが、働きながら授業を受けていた。入交先生は、通信制で単位を取るのに必要なスクーリング（面接授業）のために、全国の工場を巡って授業をしていたという。そ

こで入交先生は、若くして社会に出る生徒と接するときの入交先生の姿勢は、教員生活の中で磨かれてきたと言える。

教員が期待をしているか
生徒は敏感に察知する

授業ができるまで

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

同校の生徒には共通の課題も感じた。授業を使うことに慣れていない。だから授業でもテストでも、ことあるごとに、自分の思いを書くことを求めた。

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

出産を機に私立高校を退職し、数年後に公立高校の教員として復帰。赴いた2校目は、荒れた進路多様校だった。前の学校同様、生活力のある生徒に親しみをもつが、指導上「見張る」ことを求められ、入交先生は思い悩む。編み出したのは、発想を転換して愛をもって「見守る」ことだった。すると生徒から「先生はこの学校にきて嬉しいんやな」と声をかけられたという。生徒の敏感さを思い知った。

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

進路多様校にいたころに、入交先生はこんな思いを抱くようになる。家庭科の知見は、自分の生活のみならず、この社会や地域の暮らしをよりよくするうえでも役立つはずなのに、「私自身、足元の地域のことに関心を払ってこなかった」と。自分の暮らしす地域のことをもっと知って考えてみよう、と、約20年前に、茨木市の市民講座「まちづくり塾」に参加した。これがまた転機となった。

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」



「死」について考える授業。「ずっとずっと大好きだよ」「おばあちゃんがいるといいのにな」「わすれられないおくりもの」という3冊の絵本を使い、思ったことをみんなで話し合う。

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」

「練習すると、きちんと書けるようになるんですよ。できないのではなく、『今まで求められてこなかった』。期待して求めて寄り添うことが大事なのだと思います」



「家庭基礎」で行う人生すごろく。人生で起こってほしいイベントと、起こってほしくないイベントをグループで考え、すごろくを作成。各自の人生観の違いにも気づいていく。



1 頭で理解するだけにとどめず 心と体でわかる体験の場を創造する

「家庭基礎」の授業では、体験を通しての学びを充実させるために、実習・実験を全体の1/2以上は入れている。例えば「生命を育てる」ことを学ぶにあたって、離乳食の実習やオムツの実験、子どもと遊ぶ内容を生徒たちで考えたうえで母子との交流、母親のインタビューなどを行っているという。

2 一人ではなくみんなで育てる意識をもち 自分が興味ある分野から地域資源を開拓する

一人の力には限界があるので、入交先生は家庭科の授業を「地域の教育力を結集して」行おうとしている。力を借りるための人脈の築き方はきわめてオーソドックス。学校周辺で自分の興味のあるテーマの催しがあれば足を運び、まちの役場など官公庁にも相談する。その積み重ねでネットワークを広げていった。

3 社会や地域の中で生徒が学ぶときは 「参加」ではなく「参画」を目指す

社会や地域で生徒が何らかの体験をするとき、入交先生は「参加」ではなく「参画」の状況になることを目指す。事前に決められていたことをただ実践するために生徒が加わる（参加する）のではなく、ある課題に対して何をすればいいか、計画段階から生徒と一緒に考えて実践する（参画する）のだ。

4 生徒が自分の考えや気持ちを言語化し、 知識の定着や伝える力の向上を図る

毎回の授業やテストで、生徒に自分の考えや気持ちを記述することを求めている。言葉にすると考えが整理され、頭に残りやすくなり、言葉を使いこなすほど、自分の考えを他者に伝えやすくなるからだ。これまでの経験から、どの学校の生徒でも訓練すればできる、との手応えを得ているという。

生徒はこう変わる

視野が広がり、自ら動いて学ぶことを楽しむように



市の政策コンテスト優勝チーム、福岡市長との記念写真。高校生が小学生に料理を教え、地産地消を進める「小さな料理人計画」ほか、健康と農業活性化のための複数の政策を「美食遺産」と銘打って提案。

1年生の「家庭基礎」の授業では、「出力」の一つとして、毎時間おのおのが自分の思いをプリントに綴り、学期末には全体を振り返っての感想も書いている。それらの記述に目を通すと、生徒たちの視野が広がり、自分で考えて実践することへの自信も深まったことがうかがえた。

「共同生活を描いた映画を観て」僕は家族の在り方として普通ではない、という違和感をもった。でもよくよく考えてみると、その「普通」という考え方が固定された考えだと感じるようになった」

「身近な人が突然亡くなったたり、自分が

急に死んだりしても、後悔しない生き方をすることが大切ではないかと思った」

「子どもを持ったときにどうするかなど実用的なことを学び、実際に自分たちで（離乳食やオムツの実習・実験を）やることで理解を深めることができた」

「結婚するって、生きるって、私って何なのか。よりよく生きるにはどうすればいいのか。たくさん視点をもらったと感じています。こうしたことを考えて、何かを変えていくのは、すごく心に摩擦を生むことだと思っけれど、力みすぎず立ち向かえばよいかなあ、と思っています」

一方、2年生の選択科目「まちづくり」を取った生徒たちは、回を追うごとに授業の枠に収まらない活躍まで見せるようになる。入交先生が仲介しなくても、市役所の各課に相談に行く生徒が現れた。竹灯籠のイベントや寒天づくりのように

（コラム参照）、授業で実現させたことを先輩に引き継ぎ、地域の恒例イベントにまで発展させるケースも出てきた。

外での発表にも果敢に挑戦しており、授業から生まれた寒天づくりプロジェクトは「全国高校生MY PROJECT AWARD」(※)で文部科学大臣賞に。また、生徒たちが数人でチームを組んで参加した茨木市の政策コンテストでは、女子チームの政策「美食遺産」が、大学生や社会人のチームを抑えて最優秀賞に輝いた。

目下、入交先生は、こうした生徒発の提案をできることから実現しようと、地域の先行事例の研究にも力を入れている。「まだ私自身、わからないことだらけですけど、でも、『知らないことがある』から学ぶことは楽しいと思うのです。教員が学ぶ楽しさを知っていれば、その感覚はきっと生徒にも伝わると信じています」

INTERVIEW

地域の人と関わって自分たちで形づくる面白さを知った

森島さん「『まちづくり』の授業で、僕はもう一人と組み、竹灯籠のイベントを開催しました。茨木高校の体育祭では、骨組に竹を使った巨大マスコット9体を生徒が自作するのですが、大量の竹がゴミになる問題がありました。SDGsの取組としてその竹とペットボトルを再利用して灯籠を作り、街路に飾りまちを照らす。そんなイベントを、市役所や保育園の子たちと協力して行ったのです。中学ではアクティブではなかった自分が、高校でこんな体験ができるとは思っていませんでした」

上野さん「僕は二人組で、かつて茨木で盛んだった寒天づくりの復活に挑みました。最初は産業復活を目指したのですが、行き詰まり、先生や地域の人に相談するなかでモノ消費からコト消費という考えを知り、『まちおこしイベントの寒天づくり』という形で復活させることができました。



左：森島湧喜さん、右：上野隼人さん

先生の中には早くからその案があったそうなんですけれど、でも、先生が敷いたレールを走られるのではなく、自分で悩んだから面白かったし、いい経験になったと感じています」



思い描いている授業の在り方

目指す生徒像

- これからの自分の生き方や、自分以外の人の暮らしを、柔軟に想像することができる。
- どんな社会ならよりよく生きられるかを自分で考えようとしていて、必要な知識も身に付けている。
- 頭で理解するだけでなく、やってみて失敗があれば修復し、学んだことを実践にも生かしている。



家庭科の授業

知識や能力を「活用」する場面

- ・ 毎授業、学んだことを基に出力(実習や発表)
- ・ 準備して幼児と遊ぶ、自作の弁当や菓子人を人に贈るなど、他者のために学びを役立てる機会も重視
- ・ 「まちづくり」の授業では実社会に働きかけ

知識の「習得」や能力の「育成」

- ・ よりよく生きるための暮らしの知識(食物・被服・住居・保育・家庭経営に関する知識など)
- ・ 試行錯誤しながら自分のものにする実践力
- ・ 多様な暮らしへの想像力と、多様性を受容する力

他の教育活動や社会とのつながり

- ・ 生徒がより良い調査研究や発表に挑めるよう、まちづくりや食に関する人・団体・イベントを積極的に紹介
- ・ 自分の関わる地域活動(移動カフェ、宙いもプロジェクト、子育て食育実行委員会など)も生徒の学びの場に
- ・ 文化祭や体育祭など、体験による生徒の成長を見極め、授業の接し方を調整

(※)全国高校生MY PROJECT AWARD…探究型学習・マイプロジェクトを実行した全国の高校生が、書類選考や校内・地域の発表会、地域大会を経て、一堂に会しプロジェクト活動を発表するアワード。NPO法人カタリが主催。